

16 千浜東部区（来福村・坂里村）の紹介

筆 者 松下 育史

1 千浜東部区の概要

掛川市の南東部に位置し、東は「御前崎市」、北は「菊川市」隣接し、南は広大な遠州灘（千浜海岸）に面しています。地形は至って平坦であり、道路も碁盤の目状に幅広な通りが走り、広々した農地が多くのだかな空気の感じられる地域です。

千浜東部区は、古くから“半農半漁”の細々とした暮らしが日常でした。地理的には幹線道路や鉄道路線からも遠い辺境の地にあり、日々の生活にゆとりがない苦しい状況が永く続きました。暮らしに落ち着きが見られるようになったのは戦後であり、昭和37年から始まった“農業構造改善事業”によって生活全般が大きく向上しました。また、高度経済成長の波にのり生活に安定感が持てるようになりました。



掛川市と平成18年に合併する以前は、小笠郡大浜町（1956年誕生）であり、1973年からは小笠郡大東町に所属していました。

現在の千浜東部区の規模は、220世帯・人口731人であり、人口の35%が65歳以上の高齢者という典型的な小規模な田舎町です。

人々の気質は、100年前から継続されている“砂防作業（堆砂垣作業…一世帯一人の出役）”に見られるように協働意識が高く、活動的な所ではないかと思われます。

2 来福村・坂里村の起こりと移り変わり

（1）起こり

来福村の発生当時の様子はハッキリとは分かりません。しかし、地域に残る古い書物によると平安時代の頃（1165年頃）坂里の南西にあたる「南田の坪」という所に最初移住し、開墾開拓を始めたと言われています。どこから移住したかは明らかではありませんが、永万年間（1165年～1166年…平安後期）に“笠原源之亮寛光”が同志の者と共に三河国より移住し、高松川の南側の砂丘のもとに住居を構え、すでに居住していた住民や他地方よりの住民と一致協力して生活していたようです。

坂里村は家の数はわずかではあるけれど、古くから一つの村を造っていたようです。千浜村沿革誌によると、その始めに居住した年代は明らかではありませんが坂里の地を切り開いたのは、「源左衛門」と言われています。

（2）移り変わり

この地域は、平安時代当時、砂丘が河東山麓から坂里を経て、糸繰・国包と伸びたところに最初にできた砂丘があり、その北側は葦の生い茂った沼地で南側は芝の生えた海風の吹きすさぶ砂地でした。砂丘は50mから100m間隔で南方に作られていました。現在、最前線の砂丘は第13列目だと言われています。

最初開墾してできた砂丘の南側の土地を「海戸田」と名づけ、住民は高松川から出る清流を、唯一の水源として生活をしていたようです。その後、開墾や開拓は南方（海）に向かって進められ、今日に至っています。

3 「来福村・坂里村」及び「千浜」の地名の由来

（1） 来福村

三河国（愛知県岡崎市）より移住した“笠原源之亮寛光”は、既に居住していた住民や他地方より移住してきた人達が一致協力して開墾すれば「必ず福が来る」と呼びかけ、全住民一致協力して開墾に年々精を出し、耕地も増加し、生産も人口も増加して部落ができた。そこで、村名を「来福村」と名付けたといひます。

また、来福の名の起こりは明らかではありませんが、戦国時代の徳川・武田による“高天神城をめぐる戦い”では富士山麓方面に戦禍を避けた住民が帰村して、改めて幸福の来るのを祈って付けたのが「来福」とも言われています。

（2） 坂里村

坂里の語源は明らかではありません。一説によると河東山麓から、糸繰・国包と伸びた砂丘と平地との境にあたるため境砂土、そうして後に「坂里」に変わったと言われています。

（3） 千浜

明治 10 年、来福村と成行村が合併。この平和と繁栄を祈って、朝夕の空に眺める秀峰富士の「千古の雪」の“千”を取り、“浜”に付けてこの名がつけられました。

4 千浜東部区の時代変遷

（1） 平安時代

今の千浜東部区にあたる地域に、いつから人々が住んでいたのかは定かではありません。来福・坂里の地名が誕生する以前のこの地域には「笠原牧」という朝廷の軍馬を育てるための牧場がありました。そして、平安末期になると来福の地は「笠原荘」という荘園の一部となりました。

この頃の住民の食食物は、米・麦は少なく、粟・きび・ひえ・いも類・まめ類・菜などとわずかな魚・鳥や貝類であったと思われます。

（2） 戦国時代

戦国時代から来福村には一定の耕地が存在し、人々も集落を形成したようです。しかし、本格的な開発は戦国の世が終わり、江戸時代になると加速しました。

戦国大名であった今川氏が滅亡すると「遠江」は徳川氏と武田氏の戦乱の舞台となりました。その為、この地方の人々は戦乱を逃れて富士山麓方面に避難した住民も多かったようです。この様な状況からこの地方では寺や神社の衰退が見られました。

今川義元の時代には、遠江国は安定化し天文 19 年（1550 年）には「来福村願主七郎右衛門」によって牛頭天王社（現、柴山神社）に懸仏（神鏡）が奉納されています。また、この懸仏の周囲上部に「来福村」という地名が明記されていました。

(3) 江戸時代

来福村の開発は、江戸時代中頃まで断続的に行われました。初期の開発は“藤原彦右衛門”が中心に行われました。

当時の人々の経済力、暮らしがどのようなものであったかは明らかではありませんが、貧富の差が著しかった時代であって、一般庶民の“衣食住”はやっと生きて通れる程度であったと思われます。

生活のための仕事は農業を中心に漁業を副としていたようです。商工業もある程度はありましたが極めて小規模であったと思われます。昔の農業はもっぱら米麦、雑穀の栽培が中心で、時に衣料の材料としての綿の栽培も行われたようです。

その他は、自給用の野菜が栽培されていたと考えられます。1776 年になると、甘藷（サツマイモ）の栽培が始まりました。サツマイモは甘く美味しいので人気となり栽培面積が増えていきました。

(4) 明治・大正時代

明治・大正と私達の先人は農業・漁業を生業の中心とし、日々田畑を耕し、家庭経済の基盤を徐々に固めつつありました。しかし、日清戦争・日露戦争などの戦争がありその都度、各家庭に経済的な影響を及ぼし大きな動揺を与えました。維新以来 2 代 3 代と堅実と質朴な精神のもとに田畑を耕し懸命に働き、食生活も江戸時代以前より幾分向上が見られました。

明治 6 年（1873 年）には、地租改正が行われ、これを契機に「来福村・成行村」間には“浜地”をめぐる論争が始まりました。

(5) 昭和時代（戦前・戦後）

戦前 昭和 12 年（1937 年）の日華事変が大東亜戦争へと発展するに及んで強力な統制下におかれました。その為、物資枯渇の中、供出と配給のアンバランスが人々を死の寸前まで落ち込ませる事態に追い込むことになりました。そして、その苦しみの中を生き抜くためには、統制の中の闇取引の横行もやむお得不いこととなりました。家庭経済は筆舌に尽くし得ない大混乱におちいりました。

また、相次ぐ応召で人手がなく、田畑の肥料もないので作物の生産量は低下しました。その上、収穫物はほとんど供出することになりました。更に外国からの輸入は絶え、ガソリンもない状況で魚も捕れなくなりました。

戦後 戦いのすんだ後、極端な物資欠乏の中、人々の心は、まず金より物を手にしたいと気持ちに焦りを感じました。物価は否応なしに暴騰し、人々の身は疲れ心は荒れました。

この当時における最も大きな経済的異変は、農地の解放でした。先祖伝来の農地を解放する人、これを受ける人、悲喜こもごもの状態でもありました

こうして辛くも私たちの家庭経済に落ち着きを見せ始めたのは昭和 30 年（1955 年）頃でした。それから 10 年の経済の伸びは実に素晴らしいものがありました。それは、全国を通じてのことでもあるし、また古来貧村で通した私達の町へも及びました。

昭和 30 年代から昭和 40 年代前半には、千浜銀座商店街（「往還」通り）が形成され、賑やかで活気あふれる地域となりました。

（6）平成・令和時代

東日本大震災の教訓から防災への関心が高まり、千浜海岸には海拔 16 ㍎の防潮堤が計画され、現在工事が進行中です。地震対策には欠かせない措置ですが、地元や企業への影響は大きく、今後の成り行きに注目が集まっています。

5 砂地開墾（千浜海岸）の歴史と砂防

私たちの先祖は、この地方に住み始めてから年々開墾を進め耕地も増加していきました。江戸時代になり、当時の庄屋であった“笠原藤十郎”は、近隣の三か村（来福村・合戸村・成行村）のため海岸砂地を開墾させようと時の横須賀藩主「大須賀五郎左衛門康高」に願い出て、砂原開発が下府（藩が所有していた土地を人々に下げ渡す）され、そして開墾を試みることとなりました。これが、来福村の居村以南の砂丘開墾の始めとなりました。

今日の 150 号線バイパス以南の開墾は、1918 年（大正 7 年）以後に国有地となっていた砂丘の払い下げを受けてやっと進んだものであり、1932 年（昭和 7 年）頃に終わったようです。

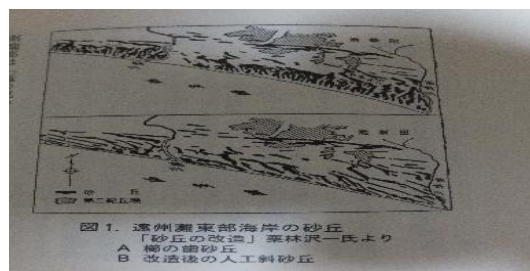
（1）砂丘開発の苦労

砂丘の開発は、こうした砂丘と砂丘の間の低地を開墾し耕地化することですが、櫛の歯状に連なる砂丘は西風が吹くと絶えず東へ移動して畑を砂で埋めてしまいました。そのため住民は、木の枝（ソダ）を砂丘に立てたり、松を植えたり時には村中総出で一斉に砂利をかぶせたりして砂丘の移動をくい止めようと努力しました。しかし、この櫛の歯砂丘の固定はいつも失敗に終わり、砂丘の開発はなかなか進まなかったようです。

千浜砂丘



くし櫛の歯砂丘



（2）砂防（堆砂垣）作業

千浜海岸は、初冬から春先にかけて“空っ風”が吹きさらし、昔から飛砂の害に悩まされてきました。一方雄大な砂丘に映える松の緑や白砂の美しさは見事であり、冬の季節風が織りなす風紋は他に比類のない景観です。そして、100 年以上続く“砂防作業は、千浜東部住民の誇りです。

① 活動の動機及び目的

飛砂や景観の状況を改善・保持するため、明治の代から住民総出による「堆砂垣（飛砂防止）」作業が今日まで脈々と受け継がれてきました。しかし、近年（昭和 50 年代）は、遠州灘周辺の河川整備（ダム建設）の影響等から砂の堆積が著しく減少し、併せて海岸の浸食作用による砂丘の荒廃化が進み、「堆砂垣」の目的は飛砂防止（砂浜保全）に重点が置かれるようになりました。

② 活動内容

飛砂防止を目的に毎年初冬の季節風が強まる前（11 月中旬～12 月上旬の間）、各世帯 1 人が出役し、全長 480m に渡る「堆砂垣」作業を実施します。

その作業は、海岸の砂浜に竹で編んだ柵を立て、周りに‘葉’の付いた“粗朶”と呼ぶ枝を植え込み、海から上がる砂を垣根の裏側に堆積させます。これを毎年繰り返すことにより砂丘が形成されていくのです。これが「堆砂垣」作業です。（※下記は、作業手順①～④）

①



②



④



③



③ 活動成果

「堆砂垣」作業の目的は、時代により変化も見られますが共通している点は各世帯 1 人の出役による共同作業であり、1 世紀に渡ってその価値感を共有し、継続した作業が実施されているところが最大の成果といえます。また、作業を通じて深められた連帯感が海岸の美化運動や海の家トイレ・駐車場及びその周辺への清掃につながり、住民活動の‘輪’を広めています。その上、近年はサーファーグループが地区住民の砂浜保全活動に共感し、彼ら自らが、海岸のゴミ拾いを実践してくれています。

④ これからの課題

今、千浜海岸の姿が大きく変わってきています。それは、浸食作用による砂浜面積の

大幅減少・松枯れ・2011年（平成23年）に起こった、「東日本大震災」を教訓に設置が進められている『防潮堤造り』により、砂防（「堆砂垣」）作業そのものを根本的に考えなければならない状況にあります。

6 「農業構造改善事業」について

（1）農業構造改善事業前の様子

昭和30年代の大浜町の農業は、水稻・茶を営む農業が中心でしたが、その規模はいずれも零細で、生産性は低く、若者は都会に働きに出ていく状況でした。その為、地域の活力は失われ町の財政も圧迫される厳しい状態にありました。

千浜地区においても、狭い田畑で主に米・麦・芋・野菜の栽培が行われていました。

農民は、畑の一面に溜池を掘り湧き水や雨水を溜め灌水していました。また、鍬で田畑を耕し、生産性の低い方法で作物を栽培していました。作物を栽培する上では、塩害・強風・水不足などの自然災害を受けやすく苦労がたえませんでした。

このような悪条件の中、米は収益率が高いため南側の砂地でも低い土地は水田として稲作を試みていました。しかし、砂地では、収穫量が少なく、稲作が終わった水田は“いぼり”と言って1畝位の高さに土を盛り上げ排水を良くして、じゃが芋・菜種等を栽培するなど大変労力をかけた農業を行っていました。

（2）農業改善事業の目的

財政再建の取り組みは、町振興の柱を「農業の振興と雇用の場の確保」におき、農業構造改善事業に着手しました。

（3）改善事業のはじまり

昭和37年（1962年）に千浜北地区で全国に先がけてモデル的に農業構造改善事業がスタートしました。

当時の農業所得は低く抑えられていました。この為、農業経営の近代化と生産性の向上に目標を置き、まず面積が狭い水田を機械化農業に適した広さの水田に整備することから始められました。また、水稻栽培をより機械化・省力化させるために、いままでの個人栽培から集落単位の完全協業栽培に変更されました。

これは、先祖伝来の個人土地所有から各人が所有面積に応じて出資、利益配分を受ける集団栽培法に転換したことになりました。

（4）近代化施設の整備

- ・栽培の機械化として→大型トラクター、コンバインの導入
- ・刈り取り後の稲の保管等の施設→カントリーエレベーター設置



(5) 水稻集団栽培法への転換による農業形態の変化

集団栽培により、農家には余剰労働力が生まれ、畑地では施設園芸に転換することが増えました。

施設園芸作物としては、特に、メロン・いちご・トマト・にんじん・石川小芋等が栽培され一大産地化となるまで伸長し、安定した専業農家が誕生しました。



(6) 千浜東部への企業誘致

- ・ 昭和 43 年（1968 年）5 月…富士色素(株)静岡工場
- ・ 昭和 45 年（1970 年）1 月…キャタラー工業(株)
- ・ 平成 2 年（1990 年）11 月…東罐興業(株)静岡工場

(7) 「農業構造改善事業」の成果

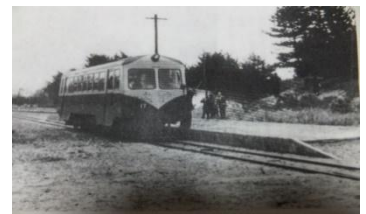
改善事業以前の大浜町は財政再建団体として、非常に厳しい状況にありました。しかし、全国に先がけて行った「農業構造改善事業」により農業生産は飛躍的に向上し、昭和 52 年（1977 年）には国から優良自治体表彰を受けるまでに大きく成長しました。

千浜東部地区は、田畑や道路が整備され、住民にとって大変生活しやすい環境が整いました。また、家庭経済も施設園芸の伸長や勤労収入（会社勤め）により安定化が進みました。

7 「千浜を走った日本一の軽便鉄道」について

かつて、静岡県内には様々な鉄道の路線がありました。その中でも、総延長 64.6 キロで「日本一の軽便鉄道」と呼ばれた静岡鉄道駿遠線は、千浜を東西に通っていました。

駿遠線は、戦前に藤枝から相良（現牧之原市）堀野新田（現御前崎市）を結んでいた藤相鉄道と、袋井から横須賀を経て三俣を結んでいた中遠鉄道が、戦後の鉄道会社合併により静岡鉄道となりました。こうして、千浜にも鉄道が通ることになりました。



旅客者の推移を資料（阿形昭『歴史に残す静岡鉄道駿遠線』2015）でみると、千浜駅発の列車は上り、下りともに始発が 7 時台で終発が 19 時台でした。一日に上下 11 本ずつの列車が千浜を発着しました。昭和 27 年（1952 年）の実績によると、千浜駅の乗降者はそれぞれ 18,000 人程度でした。しかし、昭和 38 年には 600 人前後に減少し、昭和 39 年には堀野新田から新三俣までの間、すなわち戦後に開通した範囲が廃線となりました。千浜を鉄道が通っていたのは、わずか 16 年でした。千浜を含む廃線となった区間は、徐々に乗降客を減らしていました。モータリーゼーションの進行、貨物の減少など複数の要因が重なったとされています。

千浜駅は貨物の取扱量も多かったため駅舎が立派で、転車台（車両の方向を転換する回転台）も設置されていたこともあり、昭和 30 年代の地域活性化に大きな役割を果たしました。

8 私達の心のよりどころ「柴山神社と永福寺」

(1) 柴山神社のおこり

柴山神社が造られた年月日は、明らかではありません。来福村の起源、本社棟札、神鏡等から推測して建治年間（1275年～1278年→鎌倉中期）と考えられます。



(2) 祀（祭）られている神様…祭神

京都八坂神社より、“須佐之男命・稲田姫之命”をお迎えして、柴山の森に社を設けてお祭りしたのが始まりと言われています。

当時は、牛頭天王ノ宮と呼ばれていましたが、明治3年に「柴山神社」と名前が改称されました。

(3) 現在の社殿

昭和28年（1953年）に再建されたものです。

改築の際、本殿の基礎石の下から多数の古銭が発見されました。専門家の調査によると、天元通宝・開元通宝・洪武通宝・嘉祐通宝・朝鮮通宝・永楽通宝・祥元符宝・祥簡通宝などいずれも明の時代のもや朝鮮で作られたもので、室町時代に我が国に輸入され流通した通貨と判明されました。

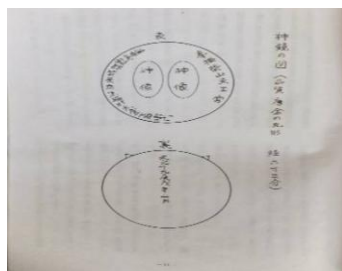
これらのお金は、信仰から建築の際社殿の下に埋められたものと言われています。

(4) 柴山神社の神鏡

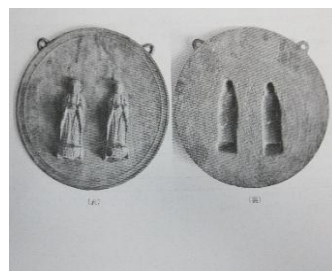
本殿内に奉祀されている神鏡（神霊として神前にかけてまつる鏡）は、祭神二柱（“須佐之男命・稲田姫之命”）を表面に記画（絵を書き付ける）し、周囲の上に「奉掛柴山天王宮」遠州城飼郡笠原之庄来福村 大倉七郎右衛門とあり、裏面に天文十九庚戌年三月（1550年3月→戦国時代）と記されています。

奉納者は、大倉七郎右衛門で、七郎右衛門は来福村のために尽力した人で、六人衆の一人として尊敬された人物でありました。

神鏡の図



懸仏



(5) 永福寺のおこり

応永元年（1394年→室町時代）村名に因んで永く福を願うため“永福寺”と言う寺を建立し、本尊として“聖観音菩薩”を祭りました。また、海に面することを以て、山号を“南浦山”という呼び名にし、相模国鎌倉五山の一つ建長寺の末寺（本寺に付属する寺）になりました。



その後、「京都妙心寺創建（1337 年）」時に、鎌倉建長寺が遠江南部の末寺を妙心寺に献じたとされ、その時、永福寺は貞永寺の末寺となりました。明治 20 年には貞永寺を離末して妙心寺の直末寺となっています。

① 本堂の建築について

永福寺所蔵の棟札によると現在の本堂が完成したのは享保 7 年（1722 年→江戸時代）でした。これは、永福寺の復興を決めて準備を始めて（正徳 6 年→1716 年 江戸時代）から 6 年がかりの大事業でした。

② 境内に祭られている堂について

地蔵堂

遠州三十六地蔵の内十番目のものと言われています。享保 12 年（1727 年）のものと、享保 20 年（1735 年）体の地蔵菩薩を祀っています。

鎮守堂

寛永 9 年（1632 年→江戸時代）金龍禅師建立

寛文年間（1661 年～1673 年→江戸時代）外禅師再建

明治 16 年奥山より半僧勧請し、堂宇（堂ののき）を建立して半僧権現を祭りました。

観音堂

“行基”（奈良時代の立派なお坊さん）が作ったと伝えられる「聖観世音菩薩」を本尊としています。

言い伝えによれば、笠原源一郎（笠原家第 14 代目当主）が前浜（千浜海岸）より観音堂本尊を拾い上げ持ち帰り（応永 2 年：1395 年→室町時代）宅地内でお祀りしていました。その後、靈験感応（不思議な力が心に感じられる）もあらわれ、多くの人の信仰があつくなりました。そこで笠原家は永福寺にお祀りを委託し、境内に堂宇を建設しました。

堂閣の再建が記録として残っているのは、文化 15 年（1818 年→江戸時代）です。その時、西国三十三か所の観世音菩薩の安置を合わせて願い求めました。

その後、安政元年（1855 年→江戸時代）の震災で堂閣が倒壊。大正 2 年（1913 年）に再建となりました。

しかし、老朽化が進み平成 22 年（2010 年）6 月に新たな来福観音堂を新築しました。

③ 「お観音様」のお祭りについて

毎年、7 月 9 日に举行されます。昔から地元はもとより近隣からも多くの人々が参拝に訪れています。33 年に一度の御開帳です。最近では平成 29 年にお観音様が来福（千浜東部区）の地に安置されてから 600 年を迎える記念の年となり、「来福観音 600 年祭」と名付けて大々的に記念行事を執り行いました。次回の御開帳は 2050 年になります。

9 「命山造り」と「桜並木造り」

平成 23 年（2011 年）の東日本大震災を教訓に千浜東部区も緊急避難場所の確保が緊急な課題となり、翌年に東部区北側（山の川）の農地を借り受け命山造りに取りかかりました。また、平成 26 年には山の川を流れる高松川の堤両側に“一木一家”を合い言葉に、全世帯による「掛川桜」の苗木の植え付けを行いました。



令和 4 年を迎えた現在、9 年間に渡る東部区の支援と有志また県・市の協力をいただき立派な避難地としての体裁が整ってきました。掛川桜も順調に成長し見応えのある桜堤になりつつあります。

近くにある、千浜こども園の園児の遊び場としてまた、お年寄りの憩いの場としての利用もみられ、これまで造成作業に携わってきた方々の苦労が報われる状況が現れています。



造成作業関係者は今後、命山としての機能を更に向上させると共に“桜祭り”など一大イベントを企画するなど千浜東部区の観光地化を目指そうと意気込んでいます。

【参考文献】

- ◆「笠原家文書」
- ◆「大浜町誌」
- ◆「千浜村沿革誌」
- ◆「大東町誌」
- ◆「陸軍遠江射場と住民」…元池新田高校教諭
浅岡芳郎著
- ◆阿形昭『歴史に残す静岡鉄道駿遠線』2015